日本の戦闘者

荒谷 卓（あらや たかし）
生年月日：昭和34年秋田県出身
略歴：昭和57年東京理科大卒、陸上自衛隊に入隊、第19普通科連隊、調査学校、第1空挺団、第39普通科連隊、陸上幕僚監部防衛部、防衛局防衛政策課戦略研究室等に勤務。平成16年特殊作戦群初代群長に就任。平成20年依願退職（1等陸佐）。
海外留学：ドイツ連邦軍指揮大学及び米国特殊作戦学校。
平成21年9月～30年10月、明治神宮武道場至誠館館長。
平成30年11月三重県熊野市に「国際共生創成協会：熊野飛鳥むすびの里」設立、代表を務める
著書：『戦う者たちへ』『サムライ精神を復活せよ』『特殊部隊vs.精鋭部隊―最強を目指せ』並木書房／『自分を強くする動じない力』三笠書房／『日本の特殊部隊をつくったふたりの“異端”自衛官―人は何のために戦うのか！―』ワニプラス
熊野飛鳥むすびの里のHPアドレス
https://musubinosato.jp/

国際共生創成協会 熊野飛鳥むすびの里
代表：荒谷 卓

日本の戦闘者の資質について、3つ目は「主動力」だ。この言葉は、俺の造語だから辞書には出てこないよ。「主動」っていう言葉は、中心になって行動するとか中心になって働きかけるっていう意味だよな。それができる力が「主動力」だ。

前回も触れたが、非通常戦を遂行する特殊部隊は少人数で作戦を遂行するわけだが、襲撃や伏撃のような直接行動をとるレンジャー、コマンド、ゲリラフォースのように、常に少人数で行動するわけではない。非通常戦を遂行する際には、教育訓練により軍隊を創り量的にも十分な戦力造成をするし、情報戦や心理戦、民事作戦により一般大衆も味方にする。戦前の日本では、陸軍中野学校の藤原岩市少佐（当時）のF機関がインド国民軍を創設したり、中野学校士官らが人選、訓練、編成してインドネシア独立軍「郷土防衛義勇軍」を創設したのは有名な話だな。日本人が発明した「欧米の植民地統治政府を転覆して民族自立のための新政府を樹立する作戦」は世界の歴史においても画期的なものだった。グローバル・ガバナンス（グローバル化推進勢力による統治）によって失われた民族の自立統治・国家の独立統治を勝ち取るための挑戦だったわけだからな。つまり、当事国の国民による正当なる政府転覆という非通常作戦を創造し実行し成功したのは俺たち日本人で、それを成し遂げたのは日本の戦闘者だよ。そのためには、人々を集結させ一つの国を新たに創り上げるという「主動力」が必要だった。一人の日本人がインド人を奮い立たせ、インドネシア人の独立軍に魂を与えた。藤原岩市自身の言葉を引用すれば「日本建国の大理想『八紘為宇（はっこういちう）』に基づき、白人のアジア支配を断って『アジア人のアジア』『大東亜共栄圏の建設』し、アジア人の心を一つにむすび心願を表明しF機関と命名した。天皇陛下の大御心（おおみごころ）『四海同胞（しかいどうほう）』の御軫念（ごしんねん）を奉じ、敵味方を超越する至誠、信念、情義、情熱に徹し、道義の戦いを捨身躬行（じっせんきゅうこう）することを現地の部下たちと誓い合った」とある。ここには、「主動力」の本質である「強烈なるリーダシップと事業推進力」の根本が述べられている。「強烈なるリーダシップと事業推進力」というのは、正しいと思っても一人では実行できないことを「この人物と一緒なら自分の志を果たすことが出来る！」と周りの者が確信できるほど強烈な信念と実行力のことだ。例えば、俺が忠誠を尽くせるのは天津日嗣（あまつひつぎ）たる天皇陛下しかいないのだが、それは何故かというと、日本建国の大理念「八紘為宇」（日本国家のエンド・ステート）の実現は、天皇陛下の下でしかできないからだ。日本の国家をまとめ、育み、永久に栄えさせる強烈なる「主動力」の根源は天皇陛下ってことだ。

俺の天皇陛下に対する忠の思いはこの一点であり、そこに俺が生まれ、生きて、死ぬ意義がある。また、俺の下に集まってきてくれる仲間は、俺と一緒に行動すれば『きっと日本再建のために自分も何かができる』と思っているに違いない。それが俺の「主動力」だ。

話は横道にそれるが、日本人が欧米の植民地化されたアジア諸国の民族自立のために始めた「政府転覆作戦」を、戦後、英米が研究して盗み取り、正反対の目的で使っている。現在の英米が進める「政府転覆作戦」は、諸国家の独立自治を潰すため、政府を乗っ取り、国家そのものをグローバル・ガバナンスの下に置くための手段として使われるようになっちまった。グローバル・ガバナンスというのは、国家をグローバル・システムに誘導し、グローバル・メカニズムを国内に整備させ、最終的には国家を乗っ取り、グローバル・エリートが完全統治する仕組みだ。最初のプロセス「グローバル化」は、開かれた社会・自由・民主主義をうたい文句に市場や自由貿易などの恩恵を宣伝し、グローバル・システムへの依存度を高めていく。その結果、食料自給率や自立経済は衰退するが、個人も国も自立して生きる苦労より、便利でらくちんな依存生活を楽しむことになる。この段階では、世界中のものが自国で手に入ったり、自由に海外に行き来できたりといった恩恵を与えられ『グローバル化は進歩で素晴らしい』と印象付けられる。次のプロセスは、「グローバル・メカニズムの確立」だ。国際的グローバル・システムに合わせた国内法や制度がどんどん作られて国家も地方も家庭も例外を許さない統一したルールでしか動かなくなってゆく。便利なサービスは全てマネーのみで運用され、個人の全ての情報はデジタル化され管理しやすいように統制される。この時点で個人の自由度は制限され、無限の将来の夢に心を弾ませる若者や社会の為に人生を費やそうとする老人は減少し、個人の楽しみだけに生きる若者や老人が増え、お金がなくとも人情や助け合いで生活できるような田舎社会は見当たらなくなってくる。最後のプロセスが「グローバル・ガバナンスの確立」だ。自分達のための便利なツールだと信じてたグローバル・システムが、完全に自分達を支配するためのツールに変わる。日本も2025年から国民の全てのデジタル情報を管理する政府クラウドがAmazonとGoogleによって管理されるが、これによってグローバル・エリートと呼ばれる特定の個人が、国家を超えて日本国民を個々に管理できる体制が整う。この最終段階において、個人の自由も権利も尊厳も、民主主義も国家の主権も消滅する。人類の「主動力」はグローバル・ガバナンスの統治者のみが有する世界の完成である。

筆者の書棚からいくつか新旧の本を紹介しよう。

数十年前に、コーポレイト・ガバナンスが言われ始めるようになって、それ迄は「社員のため社会のための会社」だったものが、「株主のための会社」に変質したように、国家も「国民と社会のための国家」が「グローバル・エリートのための国家」になるわけだ。

最近の政府転覆は、もっと露骨になってきた。ウクライナのオレンジ革命やマイダン革命のような政府転覆作戦は、その国その国民のことなど全く考慮せず、ブラックロックがいい値でウクライナの資産を買い占め、レイセオンは兵器の在庫一掃でぼろ儲け、ドイツには安価なロシアのエネルギー供給を止めて高額の米国産石油ガスを買わせ、ウクライナの山積みの借金の支払いは日本にさせる等々、自分達の利益のためにだけ利用して、人々を騙して戦わせ、用が済んだら見捨てるような極悪非道の政府転覆だ。

そもそも、第2次世界大戦後、最初に政府を転覆させられちまったのが日本とドイツだ。国民の意思を全く無視した戦後政府と戦後政体が占領米軍の手で作られちまった。さらに悪い事には、この傀儡政府が米軍占領下の時のようにメチャクチャな統治をして国民の財産をふんだくったり、食糧難で苦しめたり、戦勝国の悪口を言ってはいけませんなどと目に見える情報統制をしたり、愛国者を公職やメディアから粛正したり、文化を徹底的に破壊し続けていれば日本人も国が乗っ取られたことに気が付いただろう。しかし、米軍の占領統治方針が大転換して、日本を対ソ連戦略に使うことにしたもんだから、まんまと騙されちまった。ソ連と戦うための日本をつくるために、米国が日本の経済繁栄やら再軍備やらを推し進めることとなった。見せかけの高度経済成長と日米同盟だ。ソ連は悪者、米国は正義の味方と言う構図の中で、「米国はいい国ね。グローバル化は正しいね。戦前の日本が間違ってたのね。ペリーはいい人だったのね」とウハウハ喜んで日本人は頭がパーになったようだ。米国依存と貿易依存で日本人の「主動力」はゼロ。そこで、冷戦が崩壊し、悪玉ソ連が無くなったもんで、予定通りのグローバル・ガバナンスまっしぐらってとこだな。

政府もメディアも大手企業も有識者もすべて「主動力」がゼロになっちまってるんだから、こいつらに日本は救えないよ。だから、日本が完全に潰される前に、俺たち日本の戦闘者の出番ってところだろ。日本を救済し立て直すためには、そのためのビジョンが必要だ。日本人の家、村落、地方、国家はどうあるべきかっていう完成予想図だ。これが「主動力」の要だよ。「主動力」を備えている人間が必ず持っているものが、集団としての明確な到達地点とそこへ向かう道筋だ。そして、それを実践することに聊かの躊躇も疑念も持たず、自分を信じ全身全霊でそのために生きていける人間だ。

グローバル社会での個人の自己実現は、個人に関する欲求だから「主動力」とは全く異なる。それは、周囲の人々の幸福や社会の発展とは無縁だからな。自分の為にだけリーダーシップを発揚するようなやつはくそったれだ。

ここで言う「主動力」は、周りの人達の夢の実現への誘導力であり、社会としての豊かさのけん引力だ。人々に生きる道筋を灯すものだ。周りの人々に、『無理だと思ってたけど、頑張ってみる』と思い立たせる力だ。それが本当に実現できるかどうかはわからなくとも、実現に向けて皆で努力することに幸せを感じさせるものでなくてはならない。だからこそ、人々が協賛し『自分でできることなら何かしたい』と思うのだ。

日本の戦闘者の戦いは、常に日本人と日本国家のために為さねばならぬ。その思いにおいて人に引けを取ってはならぬ。そして実戦においては、決戦の場で、突撃の最初の一歩において先頭をきることが出来る力、それが「主動力」である。その決断と行為が、日本人の心と行動を動かすトリガーとなる。

『F機関 - アジア解放を夢みた特務機関長の手記』藤原岩市（著）・バジリコ刊

『東南アジアの解放と日本の遺産』ジョイス・C.レブラ（著）／村田克己ほか訳・秀英書房刊

『雷帝東方より来たる』田中正明（著）・自由国民社刊

『天使の並木道 ウクライナ人がウクライナ人をジェノサイドし続けた8年間の記録 2014～2022 』田中健之（著）／アジア新聞社（企画）・ヒカルランド刊

44-45.indd 44-45 2024/10/24 14:26